

日本を拠点に世界で活躍するシンガポール人フォトグラファー、レスリー・キーさん。多くのアーティスト、女優、セレブたちの信頼を得て彼の写真は、毎週のように雑誌の表紙、広告を飾る。そんな彼が、初めてカメラを手にしたのは13歳。妹さんへの、ある思いからでした。

「私には子どもの頃の写真が1枚しか無いんですよ。3歳頃に写真館で撮った1枚だけ。小学校に入って気がついたの。みんなには家族の写真がいろいろあるんだって。ウチはもともとシングルマザーだから、生まれた時からお父さんはいない。だから、お金もあまりなかったし、撮ってくれる人もいなかった。写真が無ければ、家族の思い出も少なくなるよね。」

よく学校では先生でも友達でも、お父さんの仕事は何ですか？ 家族でどこへ行きましたか？ とか質問するでしょ。そういう家族のことを話すのを私は避けてました。そういう経験をずっとしてたら、話すのが嫌になっちゃったのね。今は、ほんとによくしゃべるけど、だからその頃はあまりしゃべらない子。だって盛り上がる話が無いからね。お母さんは働きに出てるから、私と妹はおばあちゃんと暮らしていて、お母さんとはほとんど週末しか会わないし。

そんなお母さんが、私の13歳の誕生日に、何か欲しい？ って訊いてくれたの。その時、私は『カメラが欲しい』って言いました。5歳の妹も自分みたいに写真が無いから、妹には写真をいっぱい撮っておいてあげたかったから。私と同じ思い、経験はして欲しくなくて、ミノルタのシンプルな一眼レフを買ってもらった。ウチにとっては安くなかっただろうけど。

でもね。お母さんは、その半年後に急に亡くなっちゃったの。38歳。ガンを発見した時には手遅れで、1か月半ほどで亡くなっちゃった。



Heartful Story - 14

「カメラに救われて…。」

最期は病院で一緒に居られました。その瞬間は一番弱い自分になったけど、一番強い自分もその時にできた。目の前でお母さんが死んでしまっただけで、すごく弱くなってるんだけど、同時に強くならなければならぬと思った。妹がいるから。妹は当時、まだ6歳。だからそれからは、お母さんのことを考えないように、自分に時間がある時は写真を撮るのを我慢してあげた。

お母さんが亡くなって1年半後、二人とも孤児院に入って、私は学校に行きながら日系工場で働き始めました。忘れられないのは、工場にはいつも日本の雑誌が置いてあったこと。『平凡』とか『明星』とか。日本の雑誌はカラフルで、表紙の撮り方はいつも、寄りで、ハッピーで、すごくアイドルっぽい。妹もああいうふうで撮ってあげた。日本の音楽も大好きになった。ユーミン、松田聖子、中森明菜…。レコードジャケットの写真好も、すごく魅力的。ポトリレイトを撮るのが好きなのは、ああいうのをいっぱい見てるから。で、妹を撮ってるうちに同級生にも声をかけて写真を撮るようになったのね。今までは会話するきっかけが無かったけどカメラがあるから話しかけて、モデルになってもらいうことで、いっぱい友達ができました。おかげで、人と普通に話ができるようになりました。

13歳でカメラを始めて、妹を喜ばすことができた。人と話すこともできるようになった。日本の雑誌とかジャケ写を見て、カメラマンという職業に憧れることができた。そして日本の写真学校に留学して、カメラマンになった。だから私は、カメラに救われたと思う。カメラと出会わなかったら、こんなに人と話せない。話せなければ、こんなにいろんなチャレンジはできない。もっと普通の人間、静かな人間になっただ。すごくカメラに救われたね。お母さんがいなくなっても、今の自分になれたんだから。」